

ワークショップ形式の導入による学部教育効果の考察

A Study of the Undergraduate Education Effect by Introduction of Workshop Form

松岡 崇暢 Takanobu MATSUOKA

目次

- 1 はじめに
- 2 ワークショップの講義形式を導入した背景
- 3 講義の取り組み検証
- 4 ワークショップ形式を導入した成果の検証
- 5 ワークショップの導入成果と課題
- 6 おわりに

1 はじめに

大学における学部教育では、従来の教育目標や方向性に変化が見られるようになってきた。最近では人材育成の方向性に社会ニーズを汲み入れ、大学の教育理念を反映させた教育プログラムが増えている。教育を重視する大学においては、地域社会、企業、非営利組織、行政組織などを担い、支えることが可能な実践に即した人材を輩出する役割が期待されているのである。

グローバル経済の台頭、日本経済の冷え込み、新しい公共の推進など、日本社会を取り巻く生活環境はめまぐるしく変化し、様々な問題が複雑化している。これらの背景を踏まえ状況に応じ、問題解決能力を有す人材は引く手数多で、教育機関である大学への要望は高まっている。教育現場としては、ニーズに対応できるカリキュラム整備が急務の課題である。

大学教育にて問題解決能力を磨くカリキュラムを実施する前に、新入生の価値観を転換させ必要がある。大学教育では、高等学校で実施されてきた知識習得型教育から、社会で必要とされる問題発見・解決につながる教育へ上手に橋渡しができいていないという指摘がある(村橋、2008)。受験勉強の弊害だと

考えられるが、大学の講義において新入生の多くは高等学校まで培ってきた解答のある問題を解く作業に終始する。大学教育では、解答が複数存在する、もしくは解答が未だ明らかにされていない諸問題に取り組むことが必要である。学生は、このような取り組みに不慣れなことから、自ら考え試行錯誤を繰り返し、解答を導く行為が不十分であることは多々ある。そのため学部課程で求められる、学生の問題意識を踏まえたオリジナルな論点を検証することやレポートや論文執筆に欠くことのできない、問題解決能力を磨く講義の開講が必要である。学生にとって社会の諸問題を的確に分析し、解決に向けて主体的に実行できる能力を育成することは、現代教育に科せられた使命である。しかしその一方で、学生のキャリア形成にも有効になってくる(和木、2012)。

愛知学泉大学では、2011年度に現代マネジメント学部が開設されたことを機に、1年生の必修科目として「問題解決基礎1」、「問題解決基礎2」を開講し、2年生の必修科目として「問題解決基礎3」、「問題解決基礎4」を開講している。問題解決基礎1ではワークショップ^{注1)}の講義形式を導入している。従来の大学教育で実施してきた、知識を得る講義形式では修得が難しい、問題解決方法の検討を学び修得さ

せることを目指しているからである。課題発見から解決方法の立案過程には、価値創造活動に必要な様々な知識や技法が含まれ、プロジェクトのマネジメントを通じて社会人基礎力^{注2)}の発揮につながる事が可能である(那須、2012)。

講義の進め方は、3~5人程度のグループをつくり、教員が提示したテーマに従い学生主体で問題発生 of 要因を明らかにし課題の解決方法を導いている。テーマは、学生の身近な問題や関心事を題材として提供し、グループ内で活発な議論が展開できるように配慮している。

本調査報告では、新入生が最初に受講する「問題解決基礎 1」に特化して言及する。ワークショップの講義形式を導入することで、学部の教育課程にて求められる問題解決能力の修得成果と学生の意識変化について、講義終了後に提出される学生のふりかえり^{注3)}と授業アンケート^{注4)}を検証し考察する。また、講義内で重点的に取り扱った、社会人基礎力の修得状況についても合わせて言及していく。

2 ワークショップの講義形式を導入した背景

愛知学泉大学では、教育改革の中心に社会人基礎力の育成を掲げている。社会人基礎力は、2006年から経済産業省が提唱している。愛知学泉大学は、2007年に「産学連携による社会人基礎力育成・評価モデル事業」に採択されている。

現代マネジメント学部では、社会人基礎力の育成を通じ、卒業後の進路設計を明確に描けるように指導し、即戦力の社会人育成を目指している。社会人基礎力を育成していくには、担当教員が学生に知識を伝える従来型の講義形式だけでは、適切に学生へ浸透させることは難しいと考えられる。そのため、問題解決力を養い社会人基礎力を修得する科目として「問題解決基礎 1~4」が位置付けられているのである。また、3年次に開講される必修科目の「現代マネジメント実習 3・4」を受講する際に必要となる、地域社会での活動を通じ学べるように、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の修得を目指している。

問題解決基礎は、1年次、2年次の必修科目として1~4まで開講される。中でも問題解決基礎 1は、1年次で開講する必修科目であることから、社会人基礎力を構成する3つの能力について講義形式^{注5)}で解説し、12の要素については3人~5人程度の少人数グループのワークショップ形式で問題解決方法の

議論を通じて修得を目指している。問題解決基礎 1の講義にワークショップの講義形式を導入した背景として、社会人基礎力を説明し伝えるだけでは、学生の修得は非常に難しいと考えられる。例えば楽器を上手に弾く、スキーを上手に滑るようになるには、講義で技術に関する解説を聞くだけで上達することは稀である。何度も繰り返し実践することで、技術の修得は可能となるのである。社会人基礎力の修得も同様で、少人数のグループで学生同士が協働にて作業や議論を繰り返す演習が不可欠なのであるため、ワークショップ形式の講義を導入したのである。ワークショップ形式の講義の利点は、様々な価値観、生まれ育った異なる環境、興味関心分野など相違点が多い学生たちが、臆すことなく自由に議論を展開することで、飛躍的な成長を期待できるのである。

企業が新卒者の採用選考に最も重視される点^{注6)}は、コミュニケーション能力で、次に主体性が挙げられている。社会人基礎力の12要素の中には、コミュニケーション能力を支える「発信力」、「傾聴力」がある。主体性については、学生生活から常に修得させることを意識させ、さらに発揮に至るように行動を促している。社会で必要とされるコミュニケーション能力や主体性を学生に修得させるには、ワークショップ形式を講義に導入し、問題発見から解決方法の提案までを学生間で議論させる。その過程を何度も繰り返し反復させることで、学生の理解を深め行動につなげることで修得に結び付いていくと考えられるのである。

3 講義の取り組み検証

3.1 問題解決基礎 1の講義構成

問題解決基礎 1の講義は、新入生である1年次の必修科目と設定されている。学生からすると社会人基礎力の修得意義や企業が学生に求めている能力に関する知識をほとんど持たない状況で受講を余儀なくされている。このことを考慮し、問題解決基礎 1のシラバス構成で注意したことは、①高等学校までの学習習慣からの脱却を目指す、②複数の学生と議論し問題の解決方法を模索させる、③講義を通じ、問題解決方法を模索する中で、社会人基礎力を修得させる、の3点である。

①については、どの大学も学部教育の最初の試練であろう。学生からすれば、高等学校を卒業するまで行ってきた1つの解答を求めることから、解答が無いもしくは複数存在する問題に取り組み、正しい

と考えられる解答を導くことを大学教育から求められるのである。180 度価値観を転換させるので、正直同情する。しかし、社会が必要とする人材は、自分の頭で物事を深く考え解決の道筋を示すことのできる学生である。大学教育で取り組む卒業研究では、オリジナル性のある研究成果を論理的に取り纏めなければならない。急にはできないので、1 年次の必修科目から学生の価値観を転換させることを試みたのである。

②については、数人のグループで学生が主体的に議論展開する中で、意見や考えをぶつけ合いながら、より良い解決方法を導く過程から学ぶべきことは沢山あると考えた。高等学校までのワークショップは、何かを決定する場が多かったのではないかと考えられる。そのため、問題解決基礎 1 の講義では、問題解決方法や手段を導く過程で、根拠をさせることを追及させている。

③については、学生の身近な問題をテーマとして明示し、ワークショップを通じて解決方法の提案を議論させている。社会人基礎力の 12 要素が修得できるように、各講義のねらいを説明してからワークショップを実施するなど工夫した。問題解決基礎 1 のシラバス作成に取り組む中で、最も苦心したのが③であった。

3.2 問題解決基礎 1 の実施計画

講義は、当初作成したシラバスの計画通りに実施した。詳細は表 1 にて示す。基本的に社会人基礎力の能力 1 つに対して、講義形式 1 回、ワークショップ形式 2 回、報告会 1 回を行っている。ワークショップ形式の講義では、学生の進捗状況を確認し報告会を行うことで、全体の情報共有を図った。時間的な制約があり、受講学生全員を対象とした報告会は 1 回しか行うことができなかった。

3.3 ワークショップ形式の講義で取り組んだテーマ

ワークショップ形式の講義で配布した資料、使用したパワーポイント資料より、学生が議論したテーマを見ていくとする。ワークショップ形式の講義終了後に記入させた学生のふりかえりから、講義で学んだこと、意欲的に取り組んだこと、質問や意見、社会人基礎力に関するふりかえりに着目し、取り扱ったテーマの妥当性を見ていく。

4、5 回目の講義では、社会人基礎力の「考え抜く

表 1 問題解決基礎 1 のシラバス概要

回数	講義概要	講義形式
1	講義のガイダンス	講義
2	社会人基礎力の概論	講義
3	考え抜く力 1	講義
4	考え抜く力 2	ワークショップ
5	考え抜く力 3	ワークショップ
6	考え抜く力の報告会	報告会
7	前に踏み出す力 1	講義
8	前に踏み出す力 2	ワークショップ
9	前に踏み出す力 3	ワークショップ
10	チームで働く力 1	講義
11	チームで働く力 2	ワークショップ
12	チームで働く力 3	ワークショップ
13	チームで働く力報告会 1	報告会
14	チームで働く力報告会 2	報告会
15	講義全体のふりかえり	ふりかえり

注) 2、3、7、10 回目の講義は、安城学園法人本部社会人基礎力育成室の伊藤公一氏が説明をした。

力」の能力を取り扱った。4 回目の講義において、初めてワークショップ形式の講義を導入した。まず学生には、ワークショップを行う際の基本的な注意点として、「主体的に意見を述べる」、「他人の意見を否定しない」、「協調性を持つ」、「多数決ではなく、少数意見を尊重する」などを挙げて説明した。特に、意見を否定されることで学生の主体性と意欲がそがれないように、何度も注意喚起を行い、活発な意見交換による学びの地づくりに腐心した。本格的なワークショップを体験している学生はほとんどいないと考え、円滑に進行できるようにその日限定の司会（リーダー）、副リーダー、書記などの役割を与えた。ワークショップの初回であることを配慮し、バースディリング^{注7)}によるアイスブレイク^{注8)}を実施した。学生の多くは、コミュニケーション能力とは上手に会話することだと誤解をしており、言葉を発することなく意思疎通を図るコミュニケーション手法に驚きを隠せなかったようである。

この講義におけるワークショップのテーマは、「基礎演習ゼミの中から、大学運営組織のメンバーとなる学生を 1 人選ぶことになりました。どのような能力を持った学生を選び送り出しますか。必要と考える能力は 3 つまでとし、選んだ理由を説明して下さい

い。」である。

5回目の講義では、ワークショップを通じて議論された事を、グループの意見として1つに纏め上げる作業を取り組ませた。教員側の意図は議論の中で、根拠を示し意見集約することの難しさや重要性について身を持って体感させることであった。

1つ目のワークショップのテーマは、「豊田学舎に恋人(大親友)を招待するとしたら、どこを案内しますか。案内をしたいと思った理由も考えましょう。」である。2つ目のテーマは、「新入生が増えるためには、豊田学舎にどのような施設があると良いと思いますか。必要だと思った理由も考えましょう。」である。

4、5回目の講義を終えて、ワークショップ形式の講義に対する課題が幾つか浮上した。ゴールデンウィーク明けの講義であったため、多くの学生は基礎演習ゼミ内で、関係性を上手に構築できなかったため、講義では活発なワークショップをほとんど見る事ができなかった。1限目の講義であったため、遅刻者が多く他の基礎演習ゼミに紛れることが頻繁に行われていた。他にもワークショップ作業に非協力的な学生の存在などが、講義の雰囲気や壊していた。大講義室を使用したため机や椅子が不動で、ワークショップ作業に支障が生じてしまった。少しでも改善するために、基礎演習ゼミの中で更にグループを分け、3~5人程度の少人数グループにした。ワークショップの作業スペースを確保するため、模造紙の使用を取り止め、A3サイズの白紙を活用するなどして対応を講じた。

8、9回目の講義では、社会人基礎力の「前に踏み出す力」の能力を取り扱った。5回目の講義終了後、学生がワークショップの議論へスムーズに入り、自分の意見や考えをきちんと発信することは難しいと判断した。そのための対応策として、個人作業で意見を考え纏めてから、ワークショップを行うことで活発に議論を展開できるように改善した。

8回目の講義における個人ワークテーマは、「学園祭でお団子屋さんをすることになり、あなたはリーダーに選ばれました。あなたは、リーダーとして重要だと考える主体的な行動は何だと思えますか」である。その後、個人ワークで取り纏めた考えは、ワークショップに持ち寄り議論し意見集約を図った。

この講義では、ふりかえりシート記入時に「友人が材料の発注を間違え、当日は予定より少ない材料しか届きませんでした。リーダーであるあなたは、

この状況をどのようにして収めますか。」という臨機応変の対応について質問し回答を記入させている。

9回目の講義では、8回目に取り扱ったテーマに計画性を加えてワークショップの議論をさせている。具体的なテーマ内容は、学園祭での主体的な行動に加え準備期間を1年とした場合、どのような計画を練り段取りや他者との調整を行うのか考えさせている。議論が発展するように、お団子屋さんの目標とする売上金額、販売本数、単価など具体的な数字を上げさせることで、準備期間の有効な使い方を考えさせ計画性を意識させる工夫を行った。ワークショップによる議論展開の取り纏め方は、基本的に制限せず自由に取り組みさせているが、時間軸で行動計画を示すことでわかりやすく纏めることができるとアドバイスをしている。

11、12回目の講義では、社会人基礎力の「チームで働く力」の能力を取り扱った。社会人基礎力の12要素の中で、「発信力」、「傾聴力」は社会人生活や学生生活において重要視されているコミュニケーション能力につながってくる。講義も後半に差し掛かっており、学生のコミュニケーション能力は高まっており、なお新鮮さを出すためにワークショップの形式を少しアレンジしている。

11回目の講義では3人グループをつくり、「発信力」と「傾聴力」を開始時に意識させ、インタビュー形式で相手の意見を引き出すこととわかりやすく相手に伝えることに取り組んだ。なお、1つのグループを3人にした意図は、インタビューに参加しない1人が記録係りとしてA3用紙に書き込む作業をさせるためである。時間を区切り3人全員が交代で、全ての役割を担当するようにした。

11回目の講義で取り扱ったテーマは、「自分が使用している携帯電話を相手に勧める」、「あなたが住んでいる、住んでいた(実家周辺)地域の魅力を説明する」のいずれかを選び取り組ませている。

12回目の講義におけるワークショップでは、「大学で学んだことを上手に活かし、社会でどのような活躍がしたいと考えていますか」というテーマに取り組んでもらった。このテーマは今まで問題解決基礎1の講義で学んできた、社会人基礎力や議論してきた内容を踏まえなければ、提案に至ることは難しいだろう。当初、学生は戸惑いがあったが、表面的のみで物事を捉え、安易に回答を導くことのできないテーマなので、徐々に真剣味が増し白熱した議論展開が印象的であった。

12 回目の講義のみでこのテーマを終える予定であったが、進捗状況が芳しくなく 13 回目の講義でも引き続き作業を継続することにした。13 回目、14 回目の講義で計画していた報告会は 14 回目の講義のみに変更した。取り扱ったテーマが難解なので、学生の議論を深める目的で全グループの成果物に対して、コメントを記入した。14 回目の講義では、学生は記入されたコメントを参考にして、ワークショップを進めていた。学生は必ず社会へ羽ばたく必要があるため、13 回目と 14 回目の講義で実施したワークショップを体験したことで、1 年生ではあるが、自分の価値観と照らし合わせて将来を考える契機になったと考えられる。

3.4 ワークショップ形式の講義を受講した学生の反応

講義終了後に提出させたふりかえりシートから、ワークショップ形式の講義に対する学生の反応を検証していく。学生のプライバシーを配慮するため、無記名で要約した。必修科目であり、全員のふりかえりを記載することは、紙面上不可能なため、特に反応が見られた学生に着目した。ワークショップ形式の講義に関する課題に対応する必要があり、学生からの意見や質問も含めて見ていくこととする。

【4 回目の講義ふりかえり】

「ワークショップで、色々な学生と話ができて楽しい」
 「個人作業では自分の考えで進められるが、ワークショップは意見を纏めなくてはならず大変」
 「意見が食い違った時に、纏めるのが大変」
 「他人の意見を尊重し、異なる視点から物事を考えられた」
 「個人作業では意見に否定が入らず、欠点が出てくると感じた」
 「ワークショップに慣れておらず、意見が言えなかった」
 「付箋紙を使用したので、意見を発信しやすかった」
 「個人作業だと気付かないことも、ワークショップでは気付くことができた」
 「理由を付けることの必要性を感じなかった」

【5 回目の講義ふりかえり】

「根拠がしっかりとしていた意見が、最終意見となった」
 「意見に対する理由を明確にしたので、メンバーの納得や共感を得られた」

「少数意見を尊重できた」
 「みんなの意見を大事にした」
 「意見を纏める担当であったので、自分の意見ばかり通さないようにした」
 「他の人が頑張り、自分の役割が果たせなかった」
 「聞き役に徹した」

【8 回目の講義ふりかえり】

「つながりが広がるように工夫した」
 「段取りをきちんと考えた」
 「味で勝負」
 「目標の設定」
 「流行のリサーチ」
 「笑顔での対応」
 「メンバーの確保」
 「商品の種類を増やす」

【8 回目の講義ふりかえり（事態收拾プラン）】

「数量を限定して販売」
 「1 本の量を減らし、本数を確保」
 「材料の調達と店担当を分ける」
 「1 本あたりの単価を上げ、利益の確保」
 「急遽、限定イベントにする」
 「慌てず、今できることを考える」

【9 回目の講義ふりかえり】

「物事をよりよく進めて行くには、計画性が重要だと分かった」
 「計画を立てることは難しく、行動に移せなかった体験を思い出した」
 「逆算し筋道を立てることを学んだが、普段何気なく行っていた」
 「計画を立てることで、やるべきことが見えてきた」

【9 回目の講義ふりかえり（人生の中で計画的に行った体験）】

「受験勉強や試験勉強」
 「友人との遊びの計画」
 「夏休みの宿題」
 「部活の練習」
 「高等学校の学園祭」
 「ボランティアへの参加」

【11 回目の講義ふりかえり（相手の意見を引き出す

ための工夫)】

「相手が使用した言葉を使い質問する」

「相槌や頷きを入れる」

「質問に関連性を持たせる」

「話題が広がるように説明する」

「YES、NO で回答できない質問をした」

【11 回目の講義ふりかえり (わかりやすく相手に伝える工夫)】

「例を挙げ、理解を促した」

「質問の意図に合ったことを話す」

「インタビュアー以外にも解るように答えた」

「イメージしやすいように説明した」

「ゆっくりと話す」

「身振り手振りを入れる」

【12 回目の講義ふりかえり】

「考える力が重要」

「相手に意見を分かりやすく説明し伝える過程を繰り返すことで、良いワークショップになると感じた」

「物事を深く掘り下げて考えるためには、普段の生活から意識する必要がある」

「自分のふりかえりになった」

「自分の活躍が、組織にどのような影響があるのか想定して考えた」

「もっと深く考えなければならぬと痛感した」

「結果を出すだけでなく、そのプロセスが大事だと思った」

「自分の将来を思い描くことで、学生時代に何を学ぶべきなのか考えた」

「ワークショップを通じ、他人の意見を参考にすることで、考え方の幅が広がった」

「改めて自分の将来設計を見つめ直すことができた」

「学生生活は、講義以外に学べる機会が多いことに気付いた」

「抽象的な議論になったので、掘り下げるように工夫した」

「人と接することで、コミュニケーション能力や考える力が伸びると実感した」

【13 回目の講義ふりかえり】

「纏め方を先生に褒められ、嬉しかった」

「人に分かりやすく、説明することは難しい」

「働くことについて、しっかりと考えられた」

「大学でしか学べないことを切り口に議論した」

「議論の方向性が定まらず、煮詰まった」

「議論の成果を取り纏めることは難しい」

「自問自答することで、良い回答につながった」

「大きいテーマに対して、どこに焦点を置くと纏めることができるのかを考えた」

以上が、ワークショップ形式の講義を受講した学生のふりかえりである。4 回目の講義ふりかえりを見ていくと、作業が楽しい、上手に意見が言えない、纏めが大変、個人作業とワークショップの比較など特徴的な記述があった。意見に対する、理由付けの必要性を感じない学生がいたりした。初めてワークショップに取り組んだ講義であり、大変という意見が多い中、楽しいという前向きな意見を見ることができた。

5 回目の講義ふりかえりでは、議論を展開し複数の意見を纏めることができたという意見が多数あった。学生の到達度と教員側が求める到達度は異なるが、まだまだワークショップに慣れておらず多数決やじゃんけんで選択しているグループも少なからずあった。ただ、複数の意見を1つに集約しようとする意志はあり、問題解決基礎1の目的に近づいてきたと考えられる。

8 回目の講義では、ワークショップと個人の見解をふりかえりシートに記入してもらった。ワークショップに関しては、アルバイト体験、高等学校在籍時の学園祭体験など身近な生活をテーマにしたので、適切な意見が多く挙げられた。一方で、トラブル発生時の対応策については、様々な素晴らしいアイデアが満載しており、学生の柔軟性に驚きを隠せなかった。

9 回目の講義では、8 回目と同様にワークショップと個人の見解をふりかえりシートに記入してもらった。ワークショップでは、前回と同じテーマであったが、時間の概念を盛り込み計画性を議論させた。計画することは、日常生活でも体験済みではあるが、改めて重要性を認識したようであった。体験談では個人の計画と複数における計画のどちらも記入されていた。

インタビュー形式を実施した 11 回目の講義ふりかえりを見ていく。聴き手役の学生は、普段の友人間で行われる会話とは異なり、創意工夫が色濃く見られた。次に話し手役の学生は、どのようにしたら理解させ伝えられるのか試行錯誤をしていたようである。聴き手と話し手を体験することで、コミュニ

ケーションを図ることの難しさを実感できたと考えられる。

同じテーマでワークショップに取り組んだ、12回目、13回目の講義のふりかえりを見ていく。学生の多くは、深く掘り下げて物事を考える体験が乏しく、ワークショップの場で考え抜くことは大変であったようである。また、ワークショップに慣れてきた学生が増え、講義を通じ学生相互の学び合いに発展しつつある。また、主観的であるが、ワークショップを楽しそうに取り組む学生が増えてきたのも、12回目、13回目の講義であったと記憶している。

3.5 ワークショップの報告会における学生の反応

ワークショップ形式の講義では、学生に講義室の前に出て報告させる機会を設けている。報告会の実施は、プレゼンテーションによる発信力を伸ばすだけでなくとどまらず、受講した学生全体の情報共有を図ることで学び合うことが望ましいと考えたからである。報告会を実施した、学生の講義ふりかえりから反応を見ていく。

【6回目の講義ふりかえり（報告会）】

「ほかの学生の意見が聞けて楽しかった」
 「報告された意見に納得した」
 「報告に対して質問することは難しい」
 「聴き手の事を考えず、報告をしてしまった」
 「報告して、とても勉強になった」
 「報告された意見に反論したかったが、理由を聞いたら納得できた」
 「報告内容が同じでも理由が異なり驚いた」
 「報告よりも質問の方が難しいことを実感した」
 「質問の多くは、報告内容の問題点をついていない」
 「報告を聞き、納得できることと疑問に思うことがあったので、次回は質問したい」

【14回目の講義ふりかえり（報告会）】

「自分の言葉や表現を使用した」
 「下線を引き、わかりやすくした」
 「具体的な内容を報告した」
 「学んだことを、どのようにして社会で活かすのか考え報告した」
 「大学生活ですべきことを明確にし、将来につなげていきたい」
 「4年間で学ばなければならないことを中心に、報告した」

「働くことは義務であることを、自分たちの見解を提示し説明した」

「疑問に思った責任について発信した」

「人と関わることの重要性を説明した」

【学生の投票結果と主な意見】

13 グループ・・・23 票

「グループ内の意見が、きちんと纏められていた」

「意見が具体的で明確であった」

「テーマに関連した議論展開が見られた」

6 グループ・・・21 票

「成果がわかりやすい」

「具体的な内容であった」

「太字や色を変えることで、強調したい意見がわかりやすかった」

22 グループ・・・11 票

「結論に共感できた」

「制限時間を超えて説明しており、頑張っていた」

以上が、報告会を実施した講義のふりかえりである。6回目の報告会は、時間的な制約があり全てのグループが報告をすることはできなかった。報告担当の学生は人前に立つ緊張感、難しさなどを実感したふりかえりが多かった。質問担当の学生の中で、積極的に質問を行う学生は少なかったが、ふりかえりには質問に関する反省や感想が多数見られた。報告内容が同じであっても理由は異なるケースを指摘する学生がおり、様々な事を気付く学びの場になったのではないかと考えられる。

14回目の講義で実施した報告会は、全グループが報告を行った。時間的な制約があり、学生の質問時間を設けることができなかった。取り扱ったテーマが難しく、熟慮を重ねた意見が多かったと考えられる。考えることで、自分の将来に対する漠然とした不安に向き合うきっかけになることを期待したい。

また、持論を展開する学生の存在は特筆すべき事であろう。意思表示が不得手な学生が多い中、ワークショップでの議論内容を理路整然と纏め、発信した事実は講義を通じた学びの成果だと考えられる。今後は、成長した学生の輪が広がり、学年全体の底上げにつなげていく必要があるだろう。

4 ワークショップ形式を導入した成果の検証

4.1 問題解決基礎1の講義に対する学生評価

問題解決基礎1の最終講義にて、記名をさせて講義全体のふりかえりを実施した。成績評価の対象であったため、講義での学びに対する前向きな意見や感想が多かった。率直に、講義開始時と講義終了時を自己点検で比較し、学んだことや認識の変化を記入する学生が多かった。それらをすべて含め、講義に対する考察をしていく。

【問題解決基礎1の全体ふりかえり】

「初めて社会人基礎力というものを知り、必要なスキルが見えてきたことで意識が変わった」

「自分に何が足りないのか、何をすべきなのかわかった」

「初めは講義の意義がわからなかったが、自分にプラスになることがあった」

「4月の自分と比べると、良い変化があったと思う」

「社会に出る上での課題が見つかった」

「高等学校では、ワークショップで進める講義は無く新鮮であった」

「社会人基礎力とは何かから学べた」

「社会人基礎力を身に付けることは、難しいと実感した」

「講義を受けたことで、何がおかしいのか、何を直すべきなのか、自分で考えるようになった」

「最初は嫌いな講義であったが、社会人基礎力の大切さを実感できた」

「1年の春に、社会人基礎力を学べたことは大きな収穫である」

「ワークショップを通じることで、身を持って社会人基礎力が理解できた」

「ワークショップを行うことで、人に伝えることの難しさを実感した」

「自分が動かないと、何もできない講義形式であったので、自分から話し掛けることができるようになった」

「この講義を受けて、意見が言えるようになり、自分が変わったと思う」

「この講義を受けて、人の話を聞く態度が大きく変わったと実感している」

「人との関わりが苦手なので、一步引いて講義を受けてしまったので改めたい」

「この講義を受けて、周りの協力が無いと解決することは難しく、どのような行動をすべきか考えるようになった」

「自分の意見を、グループメンバーが受け入れてくれて嬉しかった」

学生のプライバシーを配慮し、講義全体のふりかえりを一部抜粋した。問題解決基礎1の講義は、ワークショップ形式の講義を、報告会を含めて9回実施しており、学生の負担は大きかったのではないかと考えられる。しかし、講義進行方法、内容に対する不満はほとんど見られなかった。

社会人基礎力の修得を目指す講義と位置付け、丁寧な講義形式、ワークショップ形式の講義を反復したことで、将来に向けて社会人基礎力を修得しようとする学生の意識向上が見られた。また、必要性を認識し、学生生活を充実させることで学び取る意欲を見せる学生もいた。多くの学生は、15回の講義のみで修得することは難しいと実感している。意識するだけで、日常生活からも学び取るチャンスは数多く存在する。学生の主体性に期待したい。

ワークショップを導入したが、大学に入学してから初めて体験した学生は多い。新鮮だと感じる学生もいれば、議論が苦手な苦痛を感じる学生もいた。ワークショップは、慣れることが上達の近道で12回目、13回目の講義くらいから変化が見られた。自分から意見を発信するなど、学生の成長を垣間見ることができた。そのことを学生自身が実感できたのは、ワークショップ形式を講義に導入した成果の一つであろう。

講義のふりかえりは、記名式で成績評価の対象としている。そのため、講義に対する率直な意見や感想を全て明らかにされていないだろう。講義に対する学生の反応を反映させるために、もう一つの指標として授業アンケートの結果を活用する。問題解決基礎1に関しては、講義最終日に138人の学生が回答している。

授業アンケートは、「講義の取り組み状況」、「受講の選択理由」、「講義で得られたこと」、「講義の良かったこと」、「講義の改善点」、「講義内容」、「講義の難易度」、「講義の進行速度」、「講義目標の達成度」の9つの項目から構成されている。便宜上、設問文章を要約し置き換えている。単純集計から見ていくとする。

表2は問題解決基礎1の講義に対する、学生の取り組み状況を示している。回答の多い順に、「ある程度取り組んだ」44.2%、「真剣に取り組んだ」42.0%、「どちらともいえない」8.7%、「取り組まなかった」

表2 講義の取り組み状況

設問	n	%
真剣に取り組んだ	58	42.0%
ある程度取り組んだ	61	44.2%
どちらともいえない	12	8.7%
取り組まなかった	3	2.2%
無回答	4	2.9%
総計	138	100.0%

2.2%という結果が出ている。1年次の必修科目ということ を考慮すると、全体的に取り組む状況は良く意欲的な学生が多かったといえるだろう。

表3 講義の選択理由

設問	n	%
学びたい内容で関心がある	31	22.5%
時間割の都合	3	2.2%
知識を深めたい	18	13.0%
資格取得に必要	2	1.4%
他に受講した講義がないから	5	3.6%
必修科目であるから	105	76.1%
容易に単位取得ができる	4	2.9%
その他	0	0.0%
無回答	0	0.0%

次に、講義の選択理由についてマルチアンサーで尋ね、その結果を表3にて示した。回答の多い順に見ていくと、「必修科目であるから」76.1%、「学びたい内容で関心がある」22.5%、「知識を深めたい」13.0%となっている。最も回答が多かった「必修科目であるから」については、予測された回答である。「学びたい内容で関心がある」、「知識を深めたい」に多く回答されていたことから、学生の向学心が高く少しは知的好奇心を刺激することができたのではないかと考えられる。今後も引き続き、学生の向学心や知的好奇心を満足させることが可能な、講義水準を保ち提供することが求められているだろう。

「容易に単位取得ができる」の設問には、2.9%しか回答されていない。必修科目の講義ではあったが、学生にとってハードルが高い講義であったと考えられる。

講義で得られたことについて、マルチアンサーで尋ね表4に示した。学生の回答が多かった順に、「新しい知識を得た」76.1%、「見方、考え方を知った」

表4 講義で得られたこと

設問	n	%
新しい知識を得た	105	76.1%
見方、考え方を知った	47	34.1%
学習や研究テーマの発見	18	13.0%
人生感の変化	19	13.8%
見方の変化	15	10.9%
現実社会への関心	27	19.6%
勉強方法や調べ方を学ぶ	8	5.8%
学問、研究の楽しさ	12	8.7%
その他	3	2.2%
無回答	0	0

34.1%、「現実社会への関心」19.6%という結果になった。上位2つについて、学生は高等学校の教育から大学教育へと教育の方向性が大きく変化し、記憶重視から自分の言葉で意見を述べる必要がある。問題解決基礎1の講義では、大学教育へスムーズに移行できるように、ワークショップ形式の講義導入、社会人基礎力の活用が学生に受け入れられたのであろう。また、高等学校までの教育内容も大幅に異なるため、上位2つの設問に多くの回答が集まる結果となったのであろう。

社会人基礎力の修得を目指す講義であったため、大学生の就職状況や社会人の厳しさなど、現実問題に即した事例を多く取り扱った。そのことを受け、3つめの「現実社会への関心」に多く回答されたのではないかと考えられる。1年次から厳しさを痛感し、社会人基礎力の修得に向けて様々な学生生活の取り組みで得られた糧は、今後の人生に活きたり期待したい。

問題解決基礎1の講義を受講して良かったことをマルチアンサーで尋ねた。回答の集計結果を表5にて示す。回答の多い順に見ていくと、「機材が活用されている」42.8%、「質問や意見が言いやすい」37.7%、「授業に活気がある」31.9%となった。

最初の回答結果を見ていく。この講義では、講義形式とワークショップ形式の講義の2パターンで実施し、講義形式では学生の理解促進を図るため、パワーポイントを活用し図、表、動画などを多用した。講義のふりかえりにおいて、動画があるとわかりやすいという学生の声は多く、その評価として授業アンケートの高い評価につながったと考えられる。一方のワークショップ形式の講義では、学生の作業ス

表5 講義の良かったこと

設問	n	%
質問や意見が言いやすい	52	37.7%
授業に活気がある	44	31.9%
資料が役立つ	21	15.2%
機材が活用されている	59	42.8%
ノートが取りやすい	1	0.7%
板書がありわかりやすい	4	2.9%
私語が少ない	3	2.2%
講義室の広さが適切	21	15.2%
受講人数が適切	13	9.4%
情報機器の設備がよい	12	8.7%
その他	3	2.2%
無回答	0	0.0%

表6 講義の改善すべき点

設問	n	%
質問や意見が言いやすくする	24	17.4%
活気のある授業にする	16	11.6%
資料の活用	18	13.0%
機材の活用	2	1.4%
教員の声が聞きにくい	19	13.8%
板書が少ない	5	3.6%
私語が多い	29	21.0%
広さが適切な講義室にする	7	5.1%
少人数の受講	13	9.4%
情報機器の設備を整える	1	0.7%
その他	13	9.4%
無回答	0	0.0%

ペースを確保するため、配布資料は必要最低限にとどめ、パワーポイントで作成したスライドを常時映すなどの工夫をしている。ワークショップに取り組む環境整備について、多少含まれた回答結果ではないかと考えられる。

次の回答結果を見ていく。多くの学生は講義時間内で、挙手し質問や意見を述べることに抵抗感がある。しかし、学生の意見を講義に反映させ改善していく必要があり、講義終了後に提出させるふりかえりシートへ自由に記入できるように配慮している。その他にも、ワークショップ形式の講義では、筆者、SA^{注9)}、社会人基礎力育成室の伊藤公一氏が、作業中は講義室を歩き回り、常に学生の質問や疑問に対応しアドバイスできる体制を整えた。このような取り組みに対する評価だと受け止めている。

最後に、「授業に活気がある」についてだが、私語の延長線上でにぎやかであるのか、白熱した議論の展開を活気と受け止めるのかで大きく異なる。ただ、学生が回答した授業アンケートであることを考慮すると、後者としての評価ではないかと考えられる。そのことと合せて、先述したが講義体制の充実が、講義の活力を生み評価されたのであろう。

講義の改善すべき点をマルチアンサーで尋ねた結果を表6にて示す。回答の多い順に、「私語が多い」21.0%、「質問や意見が言いやすくする」17.4%、「教員の声が聞きにくい」13.8%となっている。

「私語が多い」に最も多く回答されており、他学生の受講態度に対する要望であった。私語に関しては、問題解決基礎1の講義だけが問題となっているわけ

ではないが、担当教員として著者は非常に危機感を抱き厳しく対処した。しかし、系列校^{注10)}出身学生やクラブ所属学生が多く顔見知りが多い、ワークショップでの議論の脱線、新生活への解放感など要因は枚挙にいとまがない。学ぶ意欲を向上させ、理由を問わず私語を許さない環境整備という喫緊の課題が残された。

次に、「質問や意見が言いやすくする」が多く回答されている。問題解決基礎1は、186名が受講する講義であるため、講義時間内での対応に不備が生じてしまった。SAを多く配置するだけの対応で改善することは難しいと考えられる。使用講義室の選択、少人数クラスの導入、講義内容の再考など、あらゆる角度から対策を講じる必要があるだろう。特にワークショップ形式を導入する場合は、個人、グループによって必要な対応は異なる。望ましいスタイルは、担当教員がファシリテーターとしてワークショップの議論に参加し、講義を進める方法だと考えられるが、時間的な制約、マンパワー不足のため難しいだろう。

最後に、「教員の声が聞きにくい」だが、私語の対応とセットで考える必要がある。また、ワークショップの議論が白熱し盛り上がると、指示に従い次の作業へスムーズに移らないケースが多々見られた。議論の脱線や自由な議論展開をどこまでコントロールし、学生の裁量に委ねるのか線引きすることは難しい。今後の課題として検討する必要があるだろう。

授業アンケートでは、社会人基礎力の要素を含めた講義の到達目標を質問している。学生からの評価

結果を表7にて取り纏めている。学生の53.7%が、「達成した」と回答している。「一部達成」の38.4%と合わせると9割以上が回答しており、講義目標および社会人基礎力の修得に、講義を通じて貢献できたのではないかと考えられる。

4.2 講義に対する取り組み状況別評価

講義の取り組み状況から、学生が講義に対してどのような評価をしているのか考察を加え見ていく。学生の取り組み状況から、講義の選択理由を表8にて示す。問題解決基礎1は、必修科目であるため必然的に学生の大半が回答していると考えられるため、考察においては省略する。

真剣に取り組んだ学生は、「学びたい内容で関心がある」36.2%、「知識を深めたい」15.5%の順で多く回答されていた。講義内容と学生の興味関心領域が、少なからず重なり知的好奇心を刺激したと考えられる。一方で、ある程度取り組んだ学生は、「知識を深めたい」14.8%、「学びたい内容で関心がある」13.1%

表7 社会人基礎力を含めた講義目標の達成度

設問	n	%
達成した	74	53.7%
一部達成	53	38.4%
達成していない	6	4.3%
無回答	5	3.6%

と回答しており、回答順位の逆転が見られる。

表9は、講義で得られたことについて、学生の取り組み状況を示している。真剣に取り組んだ学生とある程度取り組んだ学生は、どちらも「新しい知識を得た」、「見方、考え方を知った」の順で多く回答している。このことは、社会人基礎力の修得に取り組んだことと社会の厳しさや新卒者に求められている能力について実感できたと考えられる。どちらともいえないに回答した、学ぶ意欲が高くないと考えられる学生は、「新しい知識を得た」、「見方、考え方を知った」に多く回答されており傾向は同じだが、「学問、研究の楽しさ」にも多く回答がされていた。

表8 取り組み状況別、講義の選択理由

	合計	内容関心	時間割	知識	資格取得	他にない	必修科目	単位修得	その他
	100%	22.5%	2.2%	13.0%	1.4%	3.6%	76.1%	2.9%	0.0%
真剣に取り組んだ	100%	36.2%	1.7%	15.5%	1.7%	1.7%	69.0%	3.4%	0.0%
ある程度取り組んだ	100%	13.1%	1.6%	14.8%	1.6%	1.6%	82.0%	1.6%	0.0%
どちらともいえない	100%	16.7%	8.3%	0.0%	0.0%	0.0%	75.0%	0.0%	0.0%
取り組まなかった	100%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%

※設問は省略し、表示している。

表9 取り組み状況別、講義で得られたこと

	合計	新しい知識	見方や考え方	テーマの発見	人生観の変化	見方の変化	社会の関心	勉強方法	学問の楽しさ	その他
	100%	76.1%	34.1%	13.0%	13.8%	10.9%	19.6%	5.8%	8.7%	2.2%
真剣に取り組んだ	100%	89.7%	37.9%	13.8%	17.2%	15.5%	20.7%	3.4%	8.6%	0.0%
ある程度取り組んだ	100%	67.2%	32.8%	13.1%	11.5%	9.8%	21.3%	6.6%	6.6%	3.3%
どちらともいえない	100%	75.0%	25.0%	8.3%	0.0%	0.0%	8.3%	0.0%	25.0%	0.0%
取り組まなかった	100%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%

※設問は省略し、表示している。

あまり意欲的ではなかったが、講義を通じて学問や研究の楽しさを実感できたならば一つの収穫であろう。

表10は、学生の取り組み状況から講義で良かったことを尋ね、結果を示したものである。真剣に取り組んだ学生は、「質問や意見が言いやすい」、「機材が活用されている」の順で多く回答されている。その一方で、「講義室の広さが適切」、「受講人数が適切」の回答は、ある程度取り組んだ学生と比べると回答が少なかった。「質問や意見が言いやすい」については、真剣に取り組んだ学生の回答が、ある程度取り組んだ学生のおよそ倍となっている。これらのことから、意欲的な学生ほど、ワークショップ作業のスペースが手狭と感じ、少人数による活発なワークショップでの議論展開を望んでいると考えられる。

学生の取り組み状況別に、社会人基礎力を含めた講義目標の達成度を表11にて示す。講義を真剣に取り組んだ学生は、問題解決基礎1の達成度について「達成した」77.6%、「一部達成」15.5%、「達成せず」0.0%と回答している。大多数の学生は、一部を含めて達成したと評価していた。ある程度取り組んだ学生は、「達成した」39.3%、「一部達成」55.7%、「達

成せず」4.9%と回答している。達成したと回答した学生は、大きく減少しているが一部達成を含めると、同様に大多数の学生が達成したと評価している。

このことから、講義の取り組み状況が良好な学生ほど、問題解決基礎1の達成度が高い傾向が見られた。しかし、どちらともえない、取り組まなかった学生は、達成せずの回答割合が多くなっていた。講義の達成度は、学生の取り組み状況によって差異が見られる。必修科目であるため、学生の意欲を高める努力や工夫を行い、講義の達成度を高めていくことは課題であろう。

5 ワークショップの導入成果と課題

学生の講義ふりかえりと授業アンケートの結果から、ワークショップ形式の導入意義と今後の課題を検証し考察する。

講義内で実施したワークショップでは、学生の身近なテーマを取り上げ、グループで問題解決方法の提案まで纏めている。各講義のふりかえりや取り組み姿勢から、学生の温度差は多少あるが概ね理解し提案に至っていた。しかし、学生の大半はワークショップの経験がほとんどなく、知らない人とグルー

表10 取り組み状況別、講義の良かったこと

	合計	質問、意見	授業に活気	資料役立つ	機材活用	ノートとれる	板書がある	私語少ない	講義室適切	受講人数適切	設備良い	その他
	100%	37.7%	31.9%	15.2%	42.8%	0.7%	2.9%	2.2%	15.2%	9.4%	8.7%	2.2%
真剣に取り組んだ	100%	58.6%	31.0%	15.5%	39.7%	1.7%	1.7%	1.7%	10.3%	6.9%	8.6%	0.0%
ある程度取り組んだ	100%	26.2%	31.1%	19.7%	44.3%	0.0%	3.3%	3.3%	21.3%	13.1%	6.6%	1.6%
どちらともいえない	100%	16.7%	41.7%	0.0%	50.0%	0.0%	8.3%	0.0%	0.0%	0.0%	8.3%	8.3%
取り組まなかった	100%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	33.3%

※設問は省略し、表示している。

表11 取り組み状況別、社会人基礎力を含めた講義目標の達成度

	合計	達成した	一部達成	達成せず	無回答
	100%	53.6%	38.4%	4.3%	3.6%
真剣に取り組んだ	100%	77.6%	15.5%	0.0%	6.9%
ある程度取り組んだ	100%	39.3%	55.7%	4.9%	0.0%
どちらともいえない	100%	25.0%	58.3%	16.7%	0.0%
取り組まなかった	100%	33.3%	33.3%	33.3%	0.0%

プをつくり作業することに戸惑いがあったようである。グループ編成に関する苦情や意見は、講義を通じて沢山出てきたが、実社会では初対面の人間であっても仕事のパートナーになることは多々ある。将来の備えと配属された基礎演習1のゼミ生との関係を構築させるため、グループは固定し続けた。そのため、学生間の刺激、学び合い、気付きなど、少なからずグループによる差が生じてしまった。円滑にワークショップが導入できるように、アイスブレイクから入念に行う必要があり、今後の課題である。また、必修科目であるため、様々な価値観の学生が受講する。単位修得のためだけに受講している学生の中には、ワークショップに対して非協力的な態度をとるケースが見られた。意欲的な学生の学ぶ意欲や機会を奪わないように、グループ分け、グループの人数など配慮する必要がある。

ワークショップで取り扱ったテーマだが、生活に身近なテーマで考えやすかったようである。学生は、日常生活の中で社会人基礎力を修得できるチャンスがあり、意識せず様々な能力を発揮していたことに気付くことができたようである。しかし、社会人基礎力の修得は、行動に対する自らのふりかえりが重要であるため、時間を掛ける必要がある。ワークショップでの議論だけで、修得できるものではなく、何度も繰り返しふりかえる習慣が必要である。問題解決基礎1の講義では、重点的に社会人基礎力の浸透を図ってきた。しかし、浸透レベルから脱却し修得を目指すためには、反復し訓練する場の提供が求められる。他の講義との連携を視野に入れ、より効果的な教育環境の整備を進める必要があるだろう。

ワークショップで議論された内容は、報告会を実施し学生全体で情報共有を図った。多くの学生は、人前で自分の意見や考えを発信することに慣れておらず、最初の報告会では戸惑い、極度の緊張によりスムーズに進行されなかった。質問担当の学生は、マイクを向けても話すことすらできず、取り組み状況は芳しくなかった。ワークショップの議論や人前で意見を説明することを、初めから上手に取り組むことができる学生は稀である。経験することで、徐々に慣れ、コミュニケーション能力が磨かれプレゼンテーションも上達するのである。講義では、説明することよりも聴く環境整備に尽力しなければならなかった。講義に対する興味関心が乏しい学生は、他の学生の報告内容にも興味を示さないことが多い。受講態度の悪い学生には何度も注意し、態度が改善

されない学生には報告会の進行を止め、厳しい指導を徹底した。2回目の報告会では、学生からの質問時間を設けることはできなかったが、私語は随分と減り、ふりかえりには報告内容に対するコメントが増えていた。

報告会における受講態度の変化は、社会人基礎力が浸透し将来に向けての危機感を持つ学生が増えたことも要因の一つと考えられる。また、ワークショップに慣れ、白熱した議論展開を成果として発信する意欲が芽生えたことも要因であろう。ワークショップの習熟が、学生の自信につながったと考えられる。報告会で持論を展開できる学生の存在は、ワークショップ形式の講義を導入した成果の一つではないだろうか。

講義の全体ふりかえりを見ていくと、学生は社会人基礎力の12要素についての修得状況を書くケースが増えてきた。社会人基礎力については、具体的な行動から自らふりかえる習慣を持たせるように尽力している。まだまだ、未熟なふりかえりが多い中でも、自らの行動から学ぶべきこと、反省すべきことを整理しふりかえる学生は増えている。特に、新卒者の就職状況が好転しない状況に、危機感を持つ多くの学生は社会人基礎力を1年次に学べたことを大きな収穫であったと感想を述べている。コミュニケーションに苦手意識を持つ学生の中には、ワークショップを通じ意見が言えるようになったと、自らの変化を実感していた。その一方で、コミュニケーション能力について、ただ話すことと捉えている学生が非常に多い。社会人基礎力の12要素に「発信力」と「傾聴力」がある。丁寧に解説したことで、自分の意見を相手に理解してもらうことや相手の意見を上手に引き出すことの難しさや重要性についてワークショップを通じて体感できたと考えられ、ふりかえりにも多く記述されていた。

学生の授業アンケートを見ていくと、大多数の学生が真面目に受講していた。社会人基礎力を取り上げ、ワークショップの導入により、大学教育が求める問題解決能力を養うことができた。このことが、新しい知識が得られ新しい物の見方考え方につながったと考えられる。講義の掲げた到達目標には至らないが、ある一定の成果が見られたのではないかと考えられる。

講義形式のみと比べるとワークショップ形式の講義を導入したことで、社会人基礎力、問題解決能力の修得に効果が見られ、導入の意義があったと考え

られる。しかし、これらの能力は、時間を掛けて修得すべきものであり、半年間の講義だけで検証することは難しいと考えられる。問題解決基礎1の講義では、社会人基礎力育成室の伊藤公一氏と講義後に学生のふりかえりを参考にして反省会、次週の講義に向けた検討会議を実施した。常に、学生サイドからの視点で講義を創り上げる工夫を行った。しかし、周到に準備していても、講義でワークショップを実施すると想定していない事態が起きる。教員側もきちんと講義のふりかえりを実施し、万全の準備と柔軟な講義進行を心掛ける必要性を痛感した。単なる知識の伝達にとどまらない講義であるため、学生の進捗状況を的確に把握し対応することで、学生の修得状況は飛躍的に向上させることは可能である。

6 おわりに

問題解決基礎1の講義にワークショップ形式を導入することで、問題解決能力や社会人基礎力の修得に一定の成果があり、学生の問題意識の変化などの知見が得られた。しかし、意欲が低くワークショップで発言をしない学生に対するフォローの必要性など解決すべき課題は山積している。3年次に開講される、現代マネジメント実習3・4とリンクさせ検証を重ねることで、学生の成長を促すことのできる効果的なワークショップ手法の開発と合わせて研究を推し進めていかなければならないだろう。

謝辞

問題解決基礎1の講義は、学生に社会人基礎力を修得させるために試行錯誤を繰り返した講義である。学校法人安城学園社会人基礎力育成室の伊藤公一氏には、講義の構想段階から多大なご協力とアドバイスを頂くことができた。毎回講義と検討会議に参加し、講義の改善点や学生へのアドバイスに尽力して頂いたことに謝意を表します。

注

- (1) 本稿では、グループで議論や作業を行い問題解決の提案を取り纏めると解釈を広げている。また、KJ法を主に活用している。
- (2) 2011年に現代マネジメント学部を開設し、教育改革の柱として社会人基礎力に力を入れている。
- (3) 問題解決基礎1の講義では、学んだこと、参考になったことを学生のふりかえりとして講義終了後に提出することを義務化している。講義に対する意見や質問も自由に書けるようにしている。

- (4) 愛知学泉大学では、ゼミ形式の講義以外で授業アンケートを実施している。最終講義に受講学生全員を対象に無記名で実施している。
- (5) 講義形式は、学校法人安城学園社会人基礎力育成室の伊藤公一氏に担当を依頼し、社会人基礎力の必要性から3つの能力について説明して頂いた。
- (6) 出展：経済産業省『大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査』より引用している。
- (7) 身振り手振りのみで話すことなく、4月1日を先頭にして順番に並ぶ代表的なアイスブレイクである。
- (8) アイスブレイクとは氷を溶かすという意味で、知らない人が集まり一緒に作業する前に行うことで、場の雰囲気や和ませる一種のゲームのことである。
- (9) 愛知学泉大学では、事前登録による講義アシスタントという制度がある。SAは、student assistantの略である。
- (10) 愛知学泉大学を運営する学校法人安城学園は、安城学園高等学校と岡崎城西高等学校を系列校として設置している。

引用文献

- 那須一貴 2012「プロジェクト・マネジメントの学部教育的意義」『プロジェクトマネジメント学会』プロジェクトマネジメント学会誌 14(2)、pp. 21-26.
- 村橋剛史 2008「大学の経営学教育におけるワークショップ型授業の有効性」『朝日大学経営論集』、第22号朝日大学紀要、pp. 31-44.
- 和木康光 2012「教育にイノベーションを」『学校法人安城学園』

(原稿受理年月日 2012年12月26日)